石川県育成会だより

No. 24

発行日：令和６年12月16日
発　行：公益社団法人
石川県手をつなぐ育成会
〒920-8557
金沢市本多町3-1-10
石川県社会福祉会館内
TEL　076 - 264 - 1717
FAX　076 - 264 - 2434

「災害に対応して」

石川県手をつなぐ育成会会長　藤井 優

育成会会員の皆さま、日頃より本会の事業にご理解とご協力をいただき感謝いたします。元日に発生した能登半島地震では県下全域が被災、特に能登半島北部では甚大な被害を受けました。また9月には震災復旧に懸命に力を注ぐ人たちを豪雨災害が襲い、今もなお、苦しい状況下で生活されています。

私たち手をつなぐ育成会は、全国の会員組織が呼応して義援金活動を中心とした支援活動に取り組み、大変多くの支援と激励が寄せられて、その思いを被災地の会員に届けさせていただきました。障害のある人の親や家族として同じ思いを共有する育成会の互助の精神が未曽有の災害に向かって発揮されたことが大変心強くまた、深く感謝しています。

被災地においては避難生活が長期にわたる中で、障害のある人の家族として生活を再建して平穏な日常を取り戻すためには、地域での日中支援と居住支援事業の大切さを改めて認識したところです。今後、復旧復興までには相当の年月がかかると想定されますが、当事県育成会として被災地の会員に寄り添い、復興の日まで支援し続けていきます。

震災対応の中にも実施した第4回アール・ブリュット展石川では、能登からも出展されて復興に向けた気概を示し、馳浩県知事をはじめ、多くの方々の参観をいただきました。アートを通じた社会参加で、県民に障害のある人の素晴らしい感性を表現できたこと、会員同士の共同活動として交流を深められたことが最大の成果と思っております。

来年2月の合同研修会では、「障害のある我が子に遺せるもの」～お金と相続のチョッといいお話～のテーマで、多くの会社の税務会計、経営コンサルタントをされてきた税理士法人マネジメント代表の山根敏秀先生の講演を企画しています。「親なきあと」を生きる障害のある人の自立について、今回は経済面から考える機会にしたいと思っています。

育成会は知的障害の親を中心に構成されていますが、広義でいえば発達障害になります。知的や行動の障害でも重度から中軽度の方々までを包括します。個々のニーズは多様で、中には強度の行動障害や医療的ケアの必要な方々も多くおられます。軽度の障害の方であっても社会での生き辛さに軽重の判断はつけられません。親としての役割は、愛情をもって見守り、経済的に支え、安心できる居場所を作るための地域福祉基盤を整えることかと思います。

育成会活動の着実な歩みで、障害があっても、親なきあとでも、社会の中で明るく生きることができる「共生社会」の実現を果たしていきましょう。

能登半島地震に被災して思うこと、感じたこと

「地震と豪雨」

珠洲市手をつなぐ育成会 若山 博行

令和6年1月1日、正月の一家団欒中の16時10分震度7の大地震が発生しました。防災無線で津波警報が鳴り響き家族全員で避難しました。避難所(直小学校)で待機してすぐに家に帰れると思っていましたが、そのまま避難所生活が続くとは思ってもみませんでした。翌日自宅へ見に行く途中、傾いた家・倒壊した家が町中で見られこれではしばらく家に帰れないと覚悟しました。避難所に戻り、育成会役員へ「ライン」での会員の安否確認、みんな無事とのことでホッとしました。

体育館でストーブを囲んでパイプ椅子での仮眠、避難者みんなで分けたペットボトルの水、停電・断水等ライフラインの停止は心細く辛い日々が続き、子供がパニックにならない事を願いながら毎日生活していました。パニックになったら二人で車まで行って寝転がったり、学校の中を歩きまわったりして落ち着いたらまた体育館へ戻りました。日がたつにつれ支援物資も避難所に届き、ご飯(α化米)も食べるようになりホッとしました。近所の方も日頃の付き合いで子供のことをよく知っており、少しぐらい騒いでも苦情まで出ませんでした。(本当は煩いと思っていたと思いますが・・・)すず椿も再開し、子供も通所してからは落ち着き始めました。ただパニックがひどくなった時は、避難先を考えないといけないと思っていましたが、家族ごとに畳が敷かれ横になることができ、パーテイションができ、プライバシーが確保され、5月中旬には仮設住宅へ入居することができました。半数以上の会員さんは、市外へ避難され仮設住宅に入居が決まり、少しずつ帰ってこられ、復旧の兆しが見えたところの9月21日の豪雨災害で心が折れそうです。

大谷町の仮設道路もまた寸断され一からやり直しです。珠洲市の川のほとんどが氾濫し、道路を塞ぎこの前自衛隊の支援が終わって見送ったのにまた自衛隊や他県の支援が必要となりました。これから珠洲市の復旧はどうなるか、自宅の公費解体も順番待ち状態ですし何も手につかない状態ですが一歩ずつ前を向いて進んで行きたいと思います。負けるな、珠洲! ガンバレ珠洲!

「能登半島地震に寄せて」

輪島市手をつなぐ育成会　井上 珠世

令和6年元旦、初詣から自宅に戻りそろそろ夕食準備を・・・。

そんな時に最初の揺れ。まだ余裕で「珠洲の方はたいへんだね～」と LINE していると本震が来た。長かった。怖かった。近所の方々と避難した。断水が解消して3月末に自宅へ戻るまで、日中はヘルメットを着用し自宅の片付け、夜は余震が怖くて避難所を3か所移動して過ごした。洗濯と入浴に毎週末金沢の親類宅に通う。娘は金沢で過ごすより地元で過ごすことを望んでいた。17年前の地震と違って今回は色々な支援の方々とつながることになった。

10年程前に育成会を母体として立ち上げた、地域で居場所づくりを目指すNPO法人夢かぼちゃに、沢山の方々からお声掛けを頂く。門前支所や福祉課の方々。阪神淡路大震災の時からの夢かぜ基金様「僕たちお金を出すことしかできないので・・」(初めて伺う言葉だった)。三宅島噴火の時からの東京ボランティア様の「ふれあい喫茶」では9月末まで毎週金曜日に娘たちと交流し、その後は来春まで毎月1回継続。そして、JDF様、AAR様、シャンティ様等々色々な支援。震災直後からは石川県育成会、全国の育成会。

本当に沢山の方々からご支援を賜り誠に有難うございます。震災、水害、本当に色々とありすぎです。しかし沢山の方々とつながり子供たちの笑顔いっぱいになりました。

「令和6年1月1日能登半島地震に被災して」

穴水町手をつなぐ育成会 岸田 とき子

今思えば想像をしたこともない出来事に遭い、他人事のように思っていたことが現実となるとは・・・。縦横に揺れ、ガラス戸が割れ、棚の物は落ち、しばらくは身動きができない状態で揺れの収まるのを待ち、外へ出てみると向かいの家は傾いていました。電柱はたおれそう、道路はでこぼこで、津波が来るから高台に避難して下さいとアナウンスが流れ、車を高いところへ走らせました。

家の中は電気もなし、水道も止まってライフライン無しで、家の中は寝る所の床ははずれ、いつ余震がくるかもわからないので車で1泊することにしました。その夜に3人で寒さに震えながら眠れない一夜を過ごしたのを思い出しました。このような災害に遭ってみて初めて人と人のつながりが大切なことだとつくづく思い感謝の気持ちで一杯です。
自衛隊の方々や、ボランティアの人達の活動には頭がさがる思いです。

「能登半島地震に被災して思うこと」

穴水町手をつなぐ育成会 保護者

令和6年1月1日午後4時10分。家族全員がそれぞれの部屋でくつろいでいる最中に、家全体が大きな音を立てて揺れ出しました。揺れが一旦落ち着いたところで階段を降りると、さらに激しく長い揺れがきて、立っていられなくなりました。津波を警戒して、近くの高い建物に避難しました。

平成19年能登半島地震を経験して以来、家の中の地震対策と非常持出袋の準備、避難先の想定をしていて、偶然家族も全員揃っていたので、無事に避難できました。しかし、災害用食品や飲料水の備蓄をしていなかった為、家族6人で自宅から持ち出した鯖缶詰2個とミカン缶詰1個で一日をしのぐことになった。日頃の準備は大事。その見直しも大事だなと思いました。

被災した後は、避難所から車中泊を経て、停電の解消した自宅に帰りました。子どもに社会不安障害があるので、避難所にいることが難しかったようです。何回もいなくなって探しました。余震も続いている時に、停電して真っ暗な家で安心した顔をして寝ている姿を見たら、避難所に連れていけなくなりました。
それから、自分と子ども3人は軽自動車で車中泊を2日しました。寒い時期だったので、暖房に気を使いました。自分は運転席にいたので、とても狭くて寝られませんでした。つらかったです。子どもは、「暖かかったし、足ものばして寝たよ。」と言ってくれたので安心しました。

今回の地震で、自分たちは避難所にいられないことがわかりました。そして避難所にいられなくても受けれる支援があることを知りました。

多くの人に支えられて今生きていると思います。町の様子はすっかり変わってしまいましたが、少しずつ立ち上がっていくと思います。

「能登半島地震に被災して」

能登町手をつなぐ育成会 鍛治谷 眞一

令和6年、元旦、壊滅的な地震被害に襲われた能登の事業所から報告します。

年に2回、お盆と正月に帰省することを楽しみにしていた障がいを持つ弟とわたし、妻の3人で寛いでいました。16時6分、いつもの3から5度の体感地震よりも少し揺れが大きいとは感じましたが、まだ余裕がありました。その4分後です。16時10分、いつもと違う恐怖を感じる揺れ・・・。茶ダンスは倒れ、襖戸は半分に折れてふっ跳んでいきました。スマホからは不気味なアラーム音、テレビは「津波が来ます。逃げて下さい」の叫び声が繰り返されます。

随分長く感じましたが、ようやく揺れも小さくなったので2人に「とにかく逃げるゾ」と告げ車に乗り込み、高い所を目指しましたがすぐに渋滞、前方の崖崩れで全く進めません。何時間か経って、どうやら津波の心配が無さそうだと情報を得て坂道を下り、自宅近くの消防署の駐車場に辿りつき「朝まで寒いけど、ここで車中泊だ」と2人に宣言。

1月2日、朝を迎え弟に「ここにいても食事もとれないし、寝ることも出来ん。ホームまで送るからお前は帰れ」と伝え白山市まで130㎞。なんと11時間もペットボトルのお茶だけで走りました。

○能登半島地震は前揺れと本震の2回発災。
ポイントその①　「揺れを感じたら直ぐに逃げて下さい。本震の強烈な揺れでは立つ事もできません。」
ポイントその②　「車をお持ちでしたら、燃料は満タンでなくてもある程度は確保しておいて下さい。」
ポイントその③　「車の走行にはアスファルトの裂け目に気を付けて下さい。裂け目でパンクします。」

○初めてミーティング出来たのは1月12日でした。職員も皆被災者ですから来てくれた事に感謝です。水が使えないからトイレの問題も含め、しばらくは午前中だけ週2回から再開しようと決めて、手分けして電話連絡をしました。私は全員の自宅を知っているから顔を見て確認、連絡することにしましたが家が倒壊して無かったり、崖崩れで歩いて行けなかったり、本当に大変でしたが顔を見た瞬間から涙、涙で居宅訪問して良かったと再確認しました。

○上下水道が通水したのは、連休明けの5月7日でした。トイレが流せて手を洗う、そんなことにとても感動しました。

この間、全国からたくさんの方々からお見舞いや物資救援、ご訪問を頂いたことに感謝しております。末尾になりますが2月13日、朝早くに出発されて来所された藤井会長に心から感謝いたします。

おおとり会は、また1歩、力強く歩みます。

「能登半島地震により被災して思うこと」

志賀町手をつなぐ育成会　油家　幸子

皆様から心温まった義援金を頂きましてありがとうございました。

会員の皆さんは、笑顔になりとても元気を頂きました。あの一瞬の出来事で道路の舗装が起き上がったり、建物が傷んだり、地震の凄まじさを感じました。あれから11か月になりましたが、今は解体があちこちに見られ、朝5時にはトラックが里山海道を走っているのを見かけ、「いろんな仕事に携わっている方々にご苦労様です。」と思わず頭が下がります。

会員さんの中には、子供さんが地震後に家へ入られなくなった方や、通所施設へ行かれなくなった人など、一人一人心の傷も違い家族の人たちの世話が大変です。志賀町の障害者施設「インクルしか」は障害者の避難所になっていましたが、広い駐車場は舗装が起き上がって、入るのも難しく赤紙を貼られる被害を受けました。

しかし3月には利用できるようになり、とても助かりました。会員さんの体験は、「障害があると現状を受け入れるのに時間がかかり、他の人との生活の難しさ感じた。」「近所の人たちにお世話になり、子供も私も助かりました。」「避難することもなかったが生活面で不安だった。」「水が出ない時に障害者枠で順番を取らなくても優先的に親子で風呂へ入ることが出来て助かりました。」などいろいろです。少しずつ元の生活に落ち着いてきて、11月に我が家はようやく子供達と2階で寝ることが出来ました。

この貴重な経験を人生の中に受け入れて、この先明るく頑張っていきたいと思います。

「能登半島地震により被災して思うこと、感じたこと」

羽咋手をつなぐ育成会　張田 千恵子

1月1日午後4時10分、能登半島珠洲市内で地震発生。地震の規模はM7.6。輪島市と志賀町で最大震度7を記録。羽咋市は震度5強。午後4時22分４mの大津波警報が出され高台への避難勧告が出て取り急ぎ、私と息子と愛犬を連れて徒歩で10分ほどの羽咋中学校へ避難。学校体育館はみるみるうちに避難者で一杯に。犬を連れているために中へ入ることができず、玄関先に佇んでおりましたが、車中で暖をとり9時過ぎに津波警報も解除となり帰宅。

幸いに自宅は地震による被害がないものの、4日間断水が続き、生活の水の確保に苦労しました。飲料水・トイレの水は近所に井戸水のご家庭がありご提供いただき凌ぎました。お風呂は町内に温泉施設「ユーフォリア千里浜」があり整理券配布に順番を並び、指定の時間に入浴できました。羽咋市内全域の断水解消は1カ月後の2月2日。液状化現象の家屋被害も旧羽咋市街中心部にみられ、被害の大きさは地震の規模の大きさを物語るものでした。

羽咋育成会が中心になって設立した社会福祉法人就労支援B型施設及びグループホームも断水のゆえにこの期間中は閉鎖のやむなきの状態でした。また、会員の娘さんが入所する奥能登の施設が機能せず、二次避難先として京都府の施設に行かざるをえない事になり今も続いております。母親として断腸の思いの日々でしたが、先日スマホで近況の様子の写真が届き安堵した様子でした。

「手をつなぐ9月号」には特集「能登半島地震を知る」で10名の方々がご自身の立場で実体験を基に様々な分野角度からご意見を述べられております。災害時に必要な支援の在り方、地域の防災と繋がり、支え合うことの大切さ等々が大変に参考になりました。改めて更に学習すべきと思いました。朝の来ない夜はありません。

春の来ない冬はありません。確実な一歩の前進を。（了）

「能登半島地震により被災して思うこと」

宝達志水町手をつなぐ育成会　宮城 由美子

被災して会員の皆さんが思ったこと、感じたことをお伝えしたいと思います。

一番困ったことが避難先でした。障害の軽い方は、さくらドーム、宝達志水病院、ちどり苑など町内の施設に行きましたが、他の方に迷惑をかける可能性のある方は、自家用車の中で過ごされた方がいらっしゃいました。車の中でもタブレットを使って気を紛らせたりして苦労されたようです。

水が出ないので、トイレを使える施設の駐車場に停めたりして車中泊する方が多かったです。自販機の水もすぐ売り切れてしまい、水を買いにいろいろ探しました。結局買えず実家（かほく市）までもらいに行きました。水は2日ぐらいで復旧したので、奥能登の方よりはましでしたが、水がないと何もできないと本当に実感しました。常に日頃より備えておかなければいけないと改めて思いました。

被害としては家や電柱が傾いたり（今でもなおっていません）、家の土台にひびが入ったり、道路も隆起して通れなかったりして、道路は今でもなおっていません。電気はおかげさまで通っていたので助かりました。あと、避難せず家でじっと過ごしていた方も多かったです。

やはり避難先で迷惑をかけたり、本人が過ごせないというのが一番大きいです。会員の方で自宅にキャンピングカーがあればいいと言う方もいました。物理的に許せばそれがいいですね。

この地震で改めて日頃、何もしていないと思い知らされました。もっと考えていきたいと思いました。

東海北陸大会岐阜大会・全国大会秋田大会

「東海北陸ブロック大会に参加して」

津幡町手をつなぐ育成会 稲場 葉子

今年は岐阜県羽島市での開催。バスにてお昼頃に到着。早速記念撮影をして会場内へ。個性豊かに活躍する仲間たち（ピエロに扮装・家族でチンドン屋さん）が DVD 上映され、周りの人たちと笑顔でつながっている姿に感動させられました。

大会式典後のシンポジウムは、元日に発生した能登半島地震に際しての国の取り組みについて厚労省の山根和史氏による講演がありました。各省庁より多勢の職員が派遣され対応に当たったことや1400名の DWAT の方々が福祉的支援にかけつけてくれたことなど状況や対応、今後の課題検討について語られました。私たちの見えない所で大きなご支援があったことに今更ながら感謝しかありません。次に当事県として石川県の藤井会長より現地報告がありました。育成会の視点で発災からの会員の状況、福祉事業所の状況等が報告され、今後、育成会として防災対策で取り組むべきこととして会員の安否確認の手段のひとつに携帯の LINE グループでつながっていることが重要と話されました。防災の最後の砦は「隣人との関係づくり」だというのが「共通認識」、私たちが取り組む「誰もが助け合える共生社会」の目標にもつながると力説されました。会長、お疲れさまでした。

最後に全育連の久保顧問より全育連の取り組みについて過去8年間の災害義援金等の報告と今後の災害に向けての意気込みを話されました。今回の大会に参加して改めて全国の仲間のこと、災害時の福祉的課題など、いろいろな気付きができ、有意義な一日となりました。

「東海北陸大会岐阜大会に参加して」

能美市手をつなぐ育成会 中山 勇

9月28日不二羽島文化センターで開催されました、手をつなぐ育成会の東海北陸大会に参加させていただきました。当初は敦賀まで北陸新幹線の予定だったので期待していましたが、バスをチャーターする事になりました。ゆったりした座席で快適なバスの旅でした。

大会のテーマ「その時」共にできること、～今こそ見つめなおそう 仲間との絆～をスローガンにたくさんの方が大会式典等に参加されていました。

シンポジウムでは「災害時に知的障がい者に必要な支援」と題し、厚生労働省発達障害施策調整官の山根和史氏のお話があり、避難所等における障害児者への配慮事項等について興味深いお話がありました。

能登半島地震のとき息子は、グループホームより帰省しており、家族3人は「津波がきます。高台に避難してください」という放送が流れていたのでJR跨線橋に避難しました。1時間程でみんな帰って行きました。もし家が津波で被災していたら、避難所へ行くでしょう。息子は知らない人と一緒に居られないでしょう。福祉避難所はありますが高齢者向けのような気がします。家族単位で入れる福祉避難所、例えば学校の教室等が使用出来るように、育成会としても前向きに検討していきたいと思いました。

次に、藤井会長より「能登半島の地域特徴」として能登では住民同士の関りが

深い地域性があって障がいを盾に疎外されなかったと言いたいところですが、長引く避難の集団生活のせいで「しっかり見とらなだめや、親がおとなしくさせんか」ときびしく、心無い言葉を投げかけられたという情報がありました。さぞかし当事者の親御さんは辛かったと思います。最後に久保顧問より災害支援義援金の紹介があり、育成会活動が共助に当たると感じました。そして大会に参加したことが自助に当たることと思いました。

式典ではたくさんの御来賓があり、岐阜県・市の育成会に対する理解度の高さがうかがえました。我々も地元に帰り、育成会の原点に戻り、一歩前に出た活動をと心を新たにしました。

「第56回手をつなぐ育成会東海北陸大会岐阜大会に参加して」

金沢手をつなぐ親の会 浅永 洋子

「その時」共にできること～今こそ見つめなおそう 仲間との絆～というスローガンで開催された東海北陸大会岐阜大会に参加しました。シンポジウム「災害時にできること」では、厚生労働省の山根和史氏の講演のあと、当会会長の藤井優氏から現地報告がなされました。

1月1日の能登半島地震発災当日からこれまでの遅々たる復興への日々と、そんな中でも、知的に障害のある仲間たちの無事が確認されたことなどが報告されました。そして、参加者全員が緊急時への備えが大切なことと、災害時に必要とされる支援について再確認した大会となりました。また、全国手をつなぐ育成会連合会の取り組みとして、今回の能登半島地震で被害にあわれた方々に多くのご支援をいただいたことも報告され、大変ありがたく、心強く感じた次第でした。

もう17年前のことですが、平成19年に起きました能登半島地震を経験された当時、総合養護学校の保護者さんが、被災直後に話されたことです。

「震度6の地震で、家の中はぐちゃぐちゃで、子どもを車いすに乗せて避難所に行きましたが、子どもは体をこわばらせて、とても中には入れず、その後、片づけの期間も含めてほとんどを車中で過ごしました。片づけのボランティアさんなど沢山来ていただきお世話になりましたが、子どもは好きな音楽をかけてあげれば、どうにか車の中にいてくれたので、ずっと車中で我慢させました。家の中は自分たちが頑張って片づけるので、あの子の遊び相手になってくれるボランティアさんがいてくれたら良かったと思いました。」この話をお聞きして以来17年間ずっと、このことばが頭から離れませんでした。私たちの子の多くが、自宅近くの第一次避難所で過ごすことに多くの困難を抱えることが予想されます。ただ、今回の元日に起きた地震の際には、七尾市では、「このスペースを使ったらいいよ」と言ってもらえ、体育館とは別のスペースを用意してもらえたとお聞きしました。子どもたちが、日ごろから地域の人たちとかかわりを持つようにしていたからこそ、別の場所を提供してもらえたのだろうともおっしゃっていました。

災害時、子供たちが過ごせる場所を用意するためには、いつも生活している地域の人たちとのつながりを大切にすることがとても重要であるとともに、知的障害の特性を多くの人に知ってもらう啓発活動も地道に続けていくことの大切さを再確認した大会でした。

「全国手をつなぐ育成会連合会全国大会に参加して」

小松市手をつなぐ育成会 湊 富裕

10月12日（土）～10月13日（日）秋田県秋田市にて、第9回全国手をつなぐ育成会連合会全国大会秋田大会が開催されました。2日間で約1，500人の参加があった本大会では「共生社会をめざし、将来を見据えた活動を続けよう」を大会テーマとして、各分野の現状の課題について分科会がありました。

自分は今回2回目の参加となります。秋田大会は家族を連れて初日、自分は「親なき後」の分科会に参加し、妻と息子はバスツアー（男鹿水族館）に参加しました。2日目は本人大会ともだちの会に家族で参加し、マジックや体

操など障害者の方々と楽しい時間を過ごしました。

特に高知県の障害者の方々と仲良くなり、本人も来て楽しかったようで色々と思い出を話してくれていました。改めて家族で来られてよかったなと思いました。

次回も息子が参加したいと言っているので参加したいと思います。

来年の全国大会は東京大会で11月8日（土）～11月9月（日）にあります。

皆様も参加してはいかがでしょうか。

「全国手をつなぐ育成会連合会全国大会に参加して」

金沢手をつなぐ親の会 大橋 和史

10月12日～13日に開催された秋田の全国大会に参加してきました。私が参加した12日の分科会は「知的障害者の権利を守る（権利擁護）成年後見制度の在り方を考える」第4分科会です。

基調講演は早稲田大学の山野目章夫教授による「成年後見制度のあり方を考える」がテーマです。

まず日々の暮らしに司法が重なり合い本人の権利の実現がなされるから話は始まりました。使いやすい「成年後見制度」とはなにかに話は進み、明治憲法から続く民法をもとに構成されているこの制度と現憲法の下での人権との整合性の検討が必要であり早急な課題ではあるが時間をかけて丁寧に取組むべき問題であるとのお話でした。会場との意見交換で「自分の権利（人権）を守るのにお金が必要なのはおかしいのではないか」の意見に山野目さんも同意されていました。そのあと、シンポジュウムも行われ、大変盛り上がった分科会でした。

各地区の育成会活動や身近な出来事について

各地区の本人さんやご家族など身近な日常生活の活動や思いを紹介させていただきます。

「残念でならない、配慮に欠けた発言」

加賀市手をつなぐ育成会 谷井 章

今年の7月、名古屋市において「あらゆる差別に対応した人権条例を議会に提案することとなった」との記事。これに至ったのは、昨年（令和5年）6月の「名古屋城の復元」をテーマでの市民討論会において車いすの利用者がエレベーターの設置を求めたところ、「お前が我慢せえ！」「ずうずうしい」「平等とわがままを一緒にするな！」と差別用語で批判された。市長も市の幹部もいたが、誰も制止さえしなかった。結果として「差別的な発言だった」と謝罪に追い込まれた背景がある。

検証（委）の最終評価においては「差別は単なる個人の意識の問題ではなく、多数派にとって優位な社会構造から発生し無自覚であることの問題も大きい「社会構造的差別」、社会に根付いた差別であり、一朝一夕には解消しない」と結論付けた。人権配慮に欠け、情けなく残念でならない。「ずるい」「わがまま」ではない合理的配慮が今年（令和6年）4月から事業所等での義務化、他の人が当たり前に享受しているものと同じものを得るために必要な工夫が「合理的配慮」この言葉が本格的に使われるようになってから何と10年もの歳月を要しました。この機会に市の育成会会員に向けて、改めてその義務化の意味と認識を深めるべく周知を進めていた時期でした。

「ずるい・わがまま・ずうずうしい」ではない「障がいがあるために困っている」ことを周囲に伝えることが大切。偏見はほんの一部だと信じたいが、名古屋市での社会に根付いた差別といった見方、根深い風潮があるとしている。

一人でも多くの理解者を増やし自然体で障がいのある人たちを応援していく社会になるよう訴えと努力を惜しんではならない。

「〇〇どうする？」

白山市手をつなぐ育成会　竹田 和美

「これ食べる？」 発語のない娘の意思は態度で示されます。“口を開けない” “顔をそむける” “手を払いのける” 「ごはんばかり食べないでおかずも食べようよ」 娘との攻防戦は続きます。

先日、「将来どこで暮らしたいですか？」と問いかけても、答えてくれない娘の『意思決定支援』、って実際どうしたらいいのと思ってしまいました。案件について、つらつらと本人の前で説明文を読み上げることはできます。ただ、それを本人が理解して答えを出すことができるかは謎です。

私たちは、日々の暮らしの中でいくつもの「選択」をしています。考えてみれば娘も大なり小なり「選択」をしていたんですよね。目の前に気に入らないことがあれば癇癪をおこし、欲しいものがあれば指をさし、食事・入浴・就寝等々いろいろな場面で「〇〇する？」と娘に問いかけて・・・。でもその時、娘の意思を100%聞き出せていたか、そして受け入れていたかは疑わしいです。時間に追われて娘の意思表現を待っていられなかったり、わがままだと叱ってしまったり、・・・反省です。

『小さな意思決定』の経験の積み重ねが将来の選択場面での『大きな意思決定』繋がることだと改めて知り、今更ながら蔑ろにしてはいけないと思いました。まだまだ『意思決定支援』というには程遠いですが、これからも『意思の尊重』を心にとめ、娘を支援して下さる皆様に助けていただきながら、日々過ごしていきたいと思います。

「実務者同士の情報交換会に参加して」

野々市市手をつなぐ育成会 西尾 由紀

昨年から県内の育成会の会員同士で情報交換をする会合が始まり、今年6月の開催で3回目となりました。

この会合の目的は、「他の地区会員同士が知り合い、つながりを構築する」「交流する中で自身の課題への新たな発想を得る」「知り得たことを所属する育成会の活動につなげていく」ことです。

話題は、「育成会のことを知ってもらい会員を増やすための秘策」「アール・ブリュット展で気付いた豊かな感性と捉え方」「育成会の役割と必要性」「グループホームに入居させたい時と新たに建てて欲しい時の極意」等でした。特に、グループホームに関しては、「情報を得ることや希望を伝えていくことも必要だが、子離れをするという親の決心が何よりも重要！」と聞いて、私も子どもから自立しようとしていなかったことに気付きました。また、経験豊富な先輩方の成功と後悔の話を聞けたことも、すごく勉強になりました。

今年は想像を絶する地震と豪雨が起こり、辛く不安な思いをしている方が大勢います。能登町から参加された般治谷さんが「地震発生後、早々に藤井会長が能登町に来てくれました。義援金と物資だけでなく、心の支えも頂きました。」と穏やかな口調で話されました。

育成会でつながった仲間に心が救われた方は少なくないはず。

情報交換会が共生社会を実現する活動の一つになればと思います。

「育成会活動について」

かほく市手をつなぐ育成会

本年(2024年)3 月にかほく市では障害者計画、障害福祉計画、障害児福祉計画が策定されました、その中で療育手帳所持者の動向を見てみると平成30年から令和5年までの期間に、手帳保持者は263人から297人に増加していますが、内訳ではＡ判定が169人から199人にＢ判定は94人から100人、また年齢構成別では18歳未満が2名減少、65歳以上が2名増加でほぼ均衡していますが、18歳以上65歳未満が178人から214人とこの間に増加したものすべてがこの世代です。(ちなみに人口は35182 人から 35940 人と微増していますが、年齢階層区分に大きな変動はありません。)

育成会として知的障害者の立場で本計画策定に参加しましたが、育成会の活動5年の間に育成会に入会した人はいずれも18歳未満で成人してから入会するものはおりませんので、育成会と手帳をもつ障害者と差はますます乖離していく一方です。育成会活動も昭和の時代は、入会して先輩から福祉制度の情報を得て、子供と付き合い方をまなんで、進級先や年金の手続きなど、 また新たなサービスの要望を自治体にお願いするなど、非常に意義深いものでした。しかし、現在では行政が懇厚サービスを提供してくれて、会にはいらずともほとんどの情報が手に入るし、手続きも親切丁寧に教えてもらえますので、その方面でのメリットはありませんが、地域の育成会活動は、同好会的活動としてまだ需要はあるでしょうが、その上部団体こそ活動の意義が問われているのではないでしょうか。

「Ｋさんについて」

内灘町手をつなぐ育成会 北川 悦子

Ｋ さんは昨年、お母さんを亡くしました。しばらく高齢のお父さんと住んでいましたが、現在、町内のグループホームで生活をしています。いつもお母さんといっしょでした。20年近くになる育成会の絵画教室に今までもお誘いをしていましたが、2回ほどしかきたことがありませんでした。

しかし7月からグループホームにいる先輩2人と参加してくれるようになりました。話しかけるとにこっとして首をふり、答えてくれるKさん。はじめは黙って座っていましたが、おそるおそる描きはじめました。丁寧にそっと。最初の作品は「酒好きなお父さんに」ボトルの絵です。私はうれしくって、帰りにKさんの家へ寄り、お父さんに「描いたよ」と作品をみせました。内心、グループホームへ帰らないと動かなくなるのではと思いましたが、家の中をちらっとみて帰ってきました。いっしょに暮らす仲間がいること、新しい挑戦ができたことで、Kさんの暮らしがひとつふくらんだのではと思いました。働きかけてたくさんの経験をし、心地よい世界が広がっていくものを見つけて欲しいと思っています。育成会もひとつの手助けになればよいと思う。

月刊誌「手をつなぐ」

役立つ情報が満載です。 年間購読料 3,900円 B5版 48ページ

「手をつなぐ」は、知的障害のある当事者（本人・家族）に関しての教育・福祉・労働等の諸施策を中心に、全国手をつなぐ育成会連合会が編集・発刊している月刊誌です。文字どおり、全国の仲間が「手をつなぐ」ために役立つ情報誌です。

購読のお申し込みは石川県手をつなぐ育成会まで！

TEL（076）264−1717　FAX（076）264-2434

講演会のご案内

これまであまり触れてこなかった知的障害者がいらっしゃるご家庭をはじめ関係者、ご本人さんにおける財産や相続に関する実際的なお話を伺います。

日　時：令和7年2月15日（土）13:30～16:00
（受付13:00～）

場　所：金沢大学附属特別支援学校2階高等部ホール

対　象：当事者、ご家族、育成会会員、相談員、
サポート協会会員、事業所職員、
特別支援学校 PTA、
興味関心のある方

参加費：無料

テーマ：「障害のある我が子に遺せるもの」
～お金と相続のチョッといいお話～

講師 税理士法人マネジメント代表　山根 敏秀 氏

講師プロフィール

出身：石川県鳳珠郡能登町（旧鳳至郡柳田村）

資格：税理士・行政書士・FP・登録政治資金監査人・認定経営革新等支援機関

社名：税理士法人マネジメント泉が丘・マネジメント西金沢・株式会社トータルサポート・株式会社コールソリューション・株式会社グランドリーム・社長の学校株式会社　他多数

役職：石川県商工会連合会・県内自治体入札監視委員・商工調停士

指導実績

延べ7万社を超える月次決算を診て来た経験を活かした税務、会計、経営、社員教育コンプライアンス対策など数多くの実践あり

講演会への参加を希望される場合は、メールにてお申込ください。

E-mail：ikuseikai@p2222.nsk.ne.jp　<会場の関係で参加人数に制限があることをご了承ください。>

石川県育成会の会員になりませんか！

石川県手をつなぐ育成会は、知的障害のある本人たちの権利擁護を推進し、地域で安心して暮らせる共生社会づくりをめざしています。また知的障害のある方々の社会理解と社会自立ができるように様々な活動や支援に取り組んでおります。

今年度は、親子療育キャンプ、絵画教室、ふれあい登山、社会参加活動など保護者や会員同士がふれ合う活動をはじめ、最新の障害福祉の情報が得られる研修会なども実施しております。

石川県手をつなぐ育成会の活動趣旨にご賛同いただき、活動へのご支援と会へのご入会をお願いいたします。

正　会　員	障害のある方の保護者や家族	年会費 3,000円
賛助会員	育成会活動を理解・応援してくださる学校、施設、団体及びサポート協会会員	年会費 3,000円
特別賛助会員	育成会活動を理解・応援してくださる一般の方々	年会費一口 5,000円

ご入会に関する詳細は石川県手をつなぐ育成会事務局までお問合せください。TEL076－264－1717

第17号

石川県生活サポート協会だより

発行：石川県知的障害児者生活サポート協会
〒920-8557 金沢市本多町3-1-10 石川県社会福祉会館 石川県手をつなぐ育成会内
TEL:076-264-1717　FAX:076-264-2434

「理事長就任にあたって」

石川県知的障害児者生活サポート協会理事長　三谷 芳夫

令和6年1月の能登半島地震及び9月の豪雨災害で被災されましたすべての方々に心よりお見舞い申し上げます。そして日ごろより石川県知的障害児者生活サポート協会の運営にご理解とご協力をいただき感謝いたします。

このたび石川県知的障害児者生活サポート協会の理事長に就任しました七尾鹿島手をつなぐ育成会の三谷芳夫（みたによしお）です。私は、理事長に就任してからまだ日が浅く、これから中部ブロック大会や会議等に参加して、いろいろと勉強しながらみなさまのお役にたてるよう一生懸命がんばってきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

先日、前理事長の荒田正信さんが交通事故に遭われてお亡くなりになりました。最初は、突然の訃報で信じられませんでした。荒田さんは、これまで石川県知的障害児者生活サポート協会を互助会時代から熱心に支え、障害のある方々の幸せと自立を願って、懸命に活動してこられました。全国サポート協会の加藤前理事長にも、理路整然とした意見や提言を投げかけるなど全国でも一目おかれた存在でした。これからたくさんのことをご助言いただこうと思っていた矢先の出来事でとても残念でした。荒田正信さんのご冥福をお祈りいたします。

さて今年1月1日に能登半島地震が発生しました。私が居住する七尾市の自宅は被災して半壊状態になり、ライフラインは断絶、しばらく市外へ避難しておりました。これまで遭遇したことがない甚大な災害であり、慣れない避難生活も経験しました。今の時代、こういった災害がいつ、どこで発生するかわかりません。日頃から災害に対する意識や予防、対策が大事であることをつくづく認識しました。

石川県生活サポート協会では、JIC及びAIGとの三者会談やJICとの情報交換会など話し合いの場が開催されております。お互いの考えや気持ちを直接伝えることができる貴重な場となっております。障害者にとって身近で満足できるよりよい補償制度を目指して、こういった話し合いを継続していきたいと考えております。

生活サポート総合補償制度は、令和6年度より発達障害児者を対象に加え、令和7年度より補償内容と掛金の改定が実施されます。時代とともに補償制度は進化をしておりますが、発足当初の目的が損なわれることがないように障害のある方の困り感に寄り添った補償制度となるよう皆様と一緒に考え、意見を出し合いながら制度の充実を目指していきますので、今後とも皆様方のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

石川県生活サポート協会は各地区の『社会参加事業』を支援しています。

内灘町「寄せ植え教室」

穴水町「いきいき感謝祭」

輪島市「のと鉄道アート列車展示」

石川県知的障害児者生活サポート協会とは

・石川県生活サポート協会は、石川県手をつなぐ育成会事務局内にある組織であり「知的障害児者、発達障害児者とその家族の生活上での安全・安心と福祉を推進する」といった目的で活動しております。
・前身は平成13年に保護者が立ち上げた「石川県育成会互助会」になります。当時は「病気やけがで入院することになった場合、付き添い介護や個室対応が必要な場合の差額費用等」については民間の生命保険では対応できず、知的障害者の入院は、その家族に金銭的、精神的な負担となっていました。入院介護が長期化した場合、介護者として付添人が得られないことから、介護の負担が重くのしかかり家庭崩壊の危機がありました。
・この問題を解消するために、会員相互の助け合いと安い掛金で相互に扶助する「石川県育成会互助会」が設立されました。設立には、各施設、特別支援学校、各地区育成会の多大な支援と協力がありました。平成18年に現在の「知的障害児者生活サポート協会」に名称を変更し、理事には明和特別支援学校、小松特別支援学校、いしかわ特別支援学校のPTA会長が就任して、当会を支えて頂いております。

「第4回アール・ブリュット展石川」開催！

石川県知的障害児者生活サポート協会は、石川県手をつなぐ育成会、石川県手をつなぐ育成会事業所協議会と共催で「第4回アール・ブリュット展石川」を6月27日（木）～7月2日（火）石川県庁19階ロビーで開催しました。初日に馳浩県知事に出席いただき開会式も実施しました。作品制作に関わった方々はのべ836名、238作品を出品していただきました。絵画展を通して、障害のある人たちの表現活動を通した社会参加と社会の理解を深める活動に取り組むことができました。今回、各地区育成会、事業所、特別支援学校の方々にご協力をいただき、本当にありがとうございました。

サービスセンターあしだ(小松市)
寺前麻理子さんの作品「チューリップ」

美川あんずの家(白山市)
あんずの家の仲間たちの作品
「すてきde書」

金沢大学附属特別支援学校
楠戸蓮人さんの作品
「カラフルでも負けない花」

「生活サポート総合補償制度」は、知的障害児者等を対象にした補償であり、プランによって疾病入院、ケガ、物損賠償などいろいろな生活場面に対応しております。卒業後の社会生活においても必要な補償となります。ぜひ総合補償制度加入へのご協力をよろしくお願いいたします。

総合補償制度への問い合わせは石川県生活サポート協会まで TEL076−264−1717

公式LINEアカウント　まーもんひろば

心身に障がいのあるお子様の親御様への情報発信の場として開設いたしました。

<LINE登録するとできること>
・資料のご請求
・お役立ち情報/セミナーの先行配信
・事故受付/保険金のご請求

生活サポート総合補償制度のパンフレットも
こちらからご請求が可能です！

AIG損害保険代理店　｜　ジェイアイシーセントラル株式会社　石川県金沢市西念4-18-40 NYビル3F　TEL 076-223-0323

表彰受賞おめでとうございます

第５６回手をつなぐ育成会東海北陸大会岐阜大会

浅永 洋子 氏

（石川県手をつなぐ育成会理事
金沢手をつなぐ親の会副会長）

長年にわたり親の会活動及び運営に携わり、積極的に助言をいただくなど、知的障がいの福祉増進に貢献している。また、親の会の広報委員長として長きにわたり活躍され、会員の皆様へ会報誌を通じ情報発信を行っているほか、平成31年より金沢市自立支援協議会委員及び金沢市障害者施策推進協議会委員、令和4年より共生社会推進サポーターとして障害者差別の解消や合理的配慮の提供など、積極的に取り組んでいる。

第８・９回全国手をつなぐ育成会連合会全国大会

第8回　愛媛大会
宮崎 禮子 氏

（石川県手をつなぐ育成会理事
羽咋手をつなぐ育成会相談員）

平成4年4月から羽咋手をつなぐ育成会の理事、副会長、平成20年4月からは石川県手をつなぐ育成会理事を務め、いずれの会においても会員相互のつながりを大事にして、様々な事業や活動に対して、責任感を持って取り組んできた。福祉事業推進のため関係機関、関係者への啓発普及にご尽力いただき、地域の発展に寄与した功績は大きい。

第9回　秋田大会
辰野 守保 氏

（石川県手をつなぐ育成会会員）

長年にわたり知的障害者の理解啓発と福祉推進、障害者が地域で安全・安心な生活を送ることができるよう尽力されてきた。また自らが小規模通勤寮（その後グループホーム）を設立して知的障害者が安心して日常生活を送れるように支援してきた。石川県のグループホーム創始者としていたるところで研修会講師を担当して、県内の居住支援事業の推進に貢献した。昭和36年小規模通勤寮「小松白江生活寮」を設立。平成13年グループホーム「白江ハウス」と「絆」を設立。

編集後記

令和6年1月の能登半島地震及び9月の豪雨災害で被災されたすべての方々に心よりお見舞い申し上げます。

10月17日に県育成会前副会長及び県サポート協会前理事長の荒田正信氏が不慮の事故でお亡くなりになりました。これまで26年間、障害のある子や保護者のためにたいへんご尽力いただきました。感謝とお礼を申し上げると共にご冥福をお祈りいたします。

このたび「県育成会だより NO.24」&「県サポート協会だより NO.17」を発行しました。今回は、能登半島地震で被災された方々の思いや感じられたことを取り上げて、皆さんで共有したいと考えました。たくさんの方々にお読みいただき、災害への理解と今後の備えに活かしていって欲しいと思います。これからも会員同士のつながりを大事にして有意義な育成会活動を展開していきたいです。

今回、育成会だよりを発刊するにあたって原稿の執筆など、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

事務局　江川周一